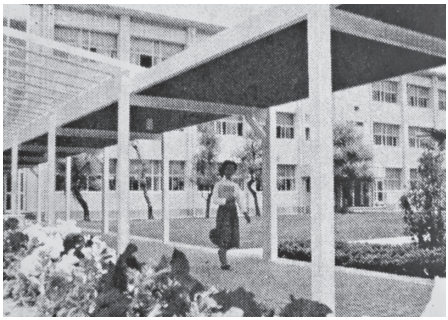
〝新生〟の呼称

1

清毅理事長による学園改革が続けられる中、昭和五十七（一九八二）年、安城学園は創立七十周年の節目を迎えた。


桜井キャンパス

この時、学園は大学、短期大学の名称変更をした。

安城学園大学は「愛知学泉大学」、安城学園女子短期大学は「愛知学泉女子短期大学」として新たな歩みを踏み出したのだった。

大学は昭和四十一（一九六六）年に愛知女子大学として発足してまもない四十三（一九六八）年に安城学園大学に名称変更し、十余年を経ていたが、ここに再び改称したのだった。

「大学は常に学名と学部名を気にしている」と一般に言われる。大学関係者、特に、私立大学関係者にとって、募集対策は常に重要な関心事であり、大学のイメージチェンジのために、全国で大学名や学部名が変えられることも頻繁である。これも少子化を迎え、大

学にマーケティングという視点が生まれたことによるとも指摘されているが、安城学園の改称はそうした皮相的な理由によるものではなかった。

名称を変えることによってデメリットが生まれる場合がある。認知度の低下、そして長年卒業生を送り出し社会から認知されてきた元のブランドの価値が薄まってしまう可能性もあり、校名を変えるのには勇断が要った。そうした中、安城学園があえてそういうデメリットを認めた上で思い切った改称に踏み切ったのには、学園が発展していく中、実態に合わせた名称にしたという背景があった。

大学では、独自の家政学を樹立するなど、大学、短期大学をリフレッシュしていく過程の中で、昭和四十七（一九七二）年に安城市桜井町の安城市立桜井高等家政学校の校舎・校地を市から有償譲渡を受け、更に周辺の土地を買収して、五十三（一九七八）年に幼児教育科をここに移転するとともに、安城市小堤町にあった短期大学の三科を岡崎キャンパスに移転した。

一方、この頃、豊田市から短期大学の誘致を受けていた。市長からは豊田市のシンボルにしたいとのことで、若林駅から近距離の高台に数千坪の提供が申し出された。

2

〝豊田進出〟の話は順調に進み、学園では昭和五十七（一九八二）年度開学を目処として準備を進めることにした。

問題は開設する学科だった。豊田市は文系を希望していたが、英文科や国文科では新鮮味に乏しいし、名古屋地区の大学、短期大学とも競合する。

そんな条件・環境のなか構想が練られ、その結果、英語力と国際的教養を同時に身につけ、実社会で活躍できる女性の育成を目標とするということで、「国際教養科」を開設することになった。

こうして学園は、安城・岡崎・豊田という西三河の代表的な三都市において等しく教育活動を展開することとなり、ここに「実態に合わせた名称に…」という声が学内に強まったのだった。

「安城学園大学」、「安城学園女子短期大学」というこれまでの名称は、法人名をそのまま冠したものだ。だが、第三者にはときに、ただ「安城」という地名を表わしたものだと受取られることも多かった。従って、大学、短期大学が岡崎にキャンパスを持つ時点から、岡崎地域を中心に、名称変更の要望が学園に寄せられていた。そこへ、短期大学国際教養科が豊田市に開設するという計画が持ち上がった。となると、豊田地域からも同様の要望が向けられることが予測される。

大学、短期大学の協議委員会、教授会で名称変更についての検討を始めた。

そして、「創立七十周年を迎えるにあたって、安城学園の教育の核としての大学、短期大学が更なる飛躍を目指すために、学名変更

国際教養科開学式（昭和 57 年）

は大きなバネになり得るし、きわめてタイムリーである」と判断され、名称の変更を決断したのだった。

新名称については、色々提案があった。決め手は、

「狭い地名によらないこと」

「建学の精神等本学独自の特色を表わすものであること」

の二点だった。

そこで拠り所とされたのが学園歌だった。

3

安城学園の学園歌「永遠の女」は、昭和二十七（一九五二）年、作詩・作曲を当時の日本で最高の人に依頼することにして、必要な費用を一日一円貯金、映画会、アルバイト等で全校でつくり出し、作詩は大木惇夫（あつお）、作曲は山田耕筰に依頼したものだった。

彩雲なびく　安城に
聖けしや　わが学び舎
知恵ぞ満つ　古きいずみ
いよよはげみて　いそしみて

こころの糧を汲みとらん
あこがれは　永遠の女
ああ　まごころをつらぬかん

新しい学名はその第一節の歌詞から採られた。

新学名は「愛知学泉大学」、「愛知学泉女子短期大学」と決定した。「愛知」は地名を表わすとともに、最高学府にふさわしい「知を愛する」という理念をも表現しており、かつて「愛知女子大学」と命名したことと同じ姿勢のものだった。そして加えた「学泉」とは、学園歌第一節にある「わが学び舎」「ふるき泉」から採られたもので、汲めどもつきせぬ「学問の泉」の府を象徴するものとされた。

山田耕筰夫妻を招いて安城学園歌発表会が講堂で行われた

こうして以来、「ガクセン」の略称は愛称ともなって地域の人々に親しまれていくことになった。

学園ではまた、大学、短期大学の名称変更に伴い、安城学園女子短期大学附属高等学校を「安城学園高等学校」とし、幼稚園も安城学園大学附属幼稚園を「愛知学泉大学附属幼稚園」、安城学園女子短期大学附属幼稚園を「愛知学泉女子短期大学附属幼稚園」とそれぞれ名称変更し、七十周年を機に新しいスタートを切ることとなった。

こうして大学、短期大学は、新名称のもと、さらなる発展への素地を築いたのであった。その画期的な発展は、昭和六十二（一九八七）年に次の段階として現れた。

4

「これからの社会の高度化、複雑化に伴う生活文化現象の変化をどう把握し対処していくか」

愛知学泉女子短期大学は、従来の服飾、生活、家政、幼児教育科の四科に新しく国際教養科を加えて五科体制となったが、これら各科の有機的な連繋を図る上でも短期大学の整理統合をしていかねばならない課題が浮かび上がってきた。

国際教養科の設置はまた、新しい文明の下での家政学像を追求している大学のあり方にも影響し、国際教養科と大学の欧米文化コース並びに家政学との関連をどのように結びつけていくか、家政学部家政学科という現体系の改組が問題となった。

委員会などでこれらの課題が検討され、家政学という学問から経営学という学問が派生して生まれたことを受けて、大学に経営系の学部を増設することにした。

直ちに準備委員会が発足。用地の取得について、豊田市に協力を要請した。

＊

その大学学部増設は、昭和六十二（一九九七）年、経営学部経営学科の開設として実現した。同

時に経営研究所を開設、研究機能も充実した。

「私の夢は家政学部だけに止まることなく展開してゆき…何々学部へと夢は際限なく続くのです」

思えば、創始者・寺部だいが夢見た将来の学園の様が、多少のデフォルメはありながら、はっきりと描き出されたといってよかった。

だが、時代による〝デフォルメ〟は避けられなかった。その変形とは、経営学部増設と同時に、家政学部を男女共学としたことだった。

「家庭におけるさまざまな生活形態を科学的に分析・研究し、実践的な試みを研究する学部」と言われる家政学部は、従来、女子を主な対象とした学問分野として見られていた。それを、家政学を創ることによって家庭を守る婦人のための学問から生活科学へと発展したとはいえ、男女共学制にして男子にも門戸を開放するということはまさに画期的な対応であり、「全国初めて」のレッテルが貼られることにもなった。

しかし、これも、清毅がこれまで随時見せてきた英断の一つだった。